◆大相撲よもやま話…

異名をもった名力士

相撲の歴史をひもとくと、たとえ横綱や大関になれなくても、磨き抜かれた芸や、唯一無二の個性で土俵を沸かせ、さまざまな異名をつけられた、忘れられない名力士たちがいる。

「もろ差し名人」と呼ばれ、昭和30年代から40年代初めにかけて長く活躍したのが鶴ケ嶺（つるがみね）だ。立ち合いの一瞬で差し込んだり、左四つや右四つになってからサッと巻き替えたりと、芸術的なほどのもろ差しが高く評価され、技能賞10回といういまだに破られぬ大記録を誇っている。

昭和30年代、同じ若松部屋で競い合ったのが「褐色の弾丸」房錦（ふさにしき）と「潜航艇」岩風（いわかぜ）。どちらも体には恵まれていなかったが、房錦は浅黒く丸っこい体で、弾丸のように立ち合いぶちかましての一気の押し。岩風は、潜航艇のように相手の懐深くに飛び込み、怪力でねじ伏せる。それぞれまったく違う個性で小よく大を制す相撲で土俵を沸かせた。

昭和40年代、最近、力士の大型化などによって減ったと言われる吊り出しを武器に活躍したのが、「吊りの名人」若浪（わかなみ）と「起重機」明武谷（みょうぶだに）。若浪は小兵ながら怪力と強靭な足腰を持ち、自分よりはるかに大きな相手も高々と持ち上げ、土俵際での打っ棄りも豪快だった。明武谷は長身を利して相手の肩越しに上手をつかみ、起重機（クレーン）のように吊り上げ、後ろに投げ捨てるようにして土俵の外に運ぶ。それぞれまったくタイプの吊りが得意な二人の対戦での「吊り合戦」も見どころ満載だった。

昭和40年代、「今牛若丸」と呼ばれた藤ノ川（ふじのかわ）。細身の体で土俵いっぱいに暴れまわる姿はまさしく牛若丸のよう。鮮やかな二枚蹴りで巨漢力士を倒したり、背中につかれても俊敏に向き直って逆に相手を転がしたりと、変幻自在な取り口が光った。昭和50年代に「サーカス相撲」と呼ばれたのが栃赤城（とちあかぎ）。持ち味は、九分九厘負けたと思われるところから、柔らかい体と重い腰を生かして逆転する相撲。押し込まれても背中を向けて回り込みながら相手をかわしたり、足を飛ばして引っ繰り返したり。曲芸のような唯一無二の相撲で存在感を示した。

現役力士のなかにも、彼らに負けない個性を持つ力士はきっといるはず。これから繰り広げられる相撲を見ながら、新しい「異名」を考えてはいかがだろうか。

個性派力士たちの相撲が動画で楽しめる

ここで紹介した力士たちの個性的な取組の数々は、いずれも、日本相撲協会公式YouTubeチャンネルの「大相撲アーカイブ場所」の「出張版」でどなたでも無料視聴できます。それぞれのQRコードからアクセスしてください。

「もろ差し名人」鶴ケ嶺

「褐色の弾丸」房錦

「潜航艇」岩風

「吊りの名人」若浪

「起重機」明武谷

「今牛若丸」藤ノ川

「サーカス相撲」栃赤城

◆大相撲「モノ」語り◆◆◆

顔触れ

幕内土俵入りと横綱土俵入りの後の「中入り」の時間、進行に余裕があるときには、「顔触れ言上」が行われる。「顔触れ」とは対戦する両力士の四股名を相撲字で書いた紙のこと。翌日の幕内取組の「顔触れ」を土俵上で読み上げるのが「顔触れ言上」だ。

「顔触れ」を書くのは行司の仕事。番付と同様、「相撲字」と呼ばれる肉太の独特の書体で、両者の四股名を並べて書いていく。たくさんの墨汁が必要なので、灰皿やどんぶり茶碗を使うことも多いという。

「顔触れ言上」も行司の仕事。顔触れの束を持って土俵に上がり、「はばかりながら明日の取組をご披露つかまつります」と口上を述べ、右手に広げた扇子の上に乗せた顔触れから、左手で1枚ずつ取り出し、東方と正面に向けて見せながら「○○には□□～」と四股名を読み上げ、左に座る呼出しに渡す。呼出しは左手に持った顔触れを西方と向正面に見せ、右手に持った束の上に重ね、東方と向正面に見せる。全取組の披露後、行司が「右、相務めます間、明日もにぎにぎしく、ご来場をお待ち申しあげます」と口上を述べる。そんな所作や口上にも、大相撲の粋で機能的な伝統が息づいている。

令和6年九月場所、昇格したばかりの42代式守伊之助が顔触れ言上を行う

◆九州場所の優勝力士◆◆◆

大関栃ノ海が柏鵬を連破して2回目の優勝

昭和38年11月場所優勝

栃ノ海（西大関 14勝1敗）

昭和38年十一月場所の注目は、直前の九月場所千秋楽結び、全勝同士で対戦した「柏鵬」の二人だった。この大一番を制し、4場所連続休場明けで涙の復活優勝を飾った柏戸が東横綱。ライバル柏戸に敗れて2場所連続で優勝を逃し、雪辱を期す大鵬が西横綱。豊山、栃ノ海、佐田乃山、北葉山、栃光の5大関が両横綱を追うという構図だった。

ところが場所が始まると、序盤から両横綱に土がつく波乱の展開に。初日に柏戸が東前頭三枚目房錦に敗れた後、三日目には柏戸が西前頭二枚目小城ノ花に、大鵬が東前頭四枚目豊國に敗れてそろって金星献上。八日目にも、柏戸が西関脇岩風に敗れて3敗目、大鵬は西小結羽黒花に敗れて2敗目を喫した。

そんな中、優勝争いを引っ張ったのが西大関栃ノ海。小さな体にもかかわらず、両前ミツを拝み取りした寄りや、切れ味鋭い出し投げなど、スピード感あふれる相撲が光る栃ノ海は、昭和37年五月場所後に大関昇進。その後も安定した成績を続け、大関9場所目となるこの場所、初日から全勝街道を突き進んで六日目には単独首位に。九日目にはただ一人1敗で追っていた東大関豊山が岩風に敗れて2敗目を喫し、後続に2差の独走態勢となった。

しかし、十一日目、優勝を意識して硬くなったか、栃ノ海は西張出大関北葉山に寄り倒されて初黒星。単独首位は守ったが、1差の2敗に大鵬、2差の3敗に柏戸、豊山ら5人が続く展開となった。重圧がのしかかるなか、十二日目に岩風を押し出し、十三日目に3敗の横綱柏戸と対戦した。ここまでの対戦成績は栃ノ海の3勝7敗と分が悪かったが、右四つから左を巻き替えてモロ差しとなり、頭をつけた栃ノ海は、ヒジを張りながら出て危なげなく寄り切り、1敗を堅守。まず一つ目の関門を突破し、十四日目、大鵬との大一番を迎えた。

1敗で単独首位の栃ノ海が勝てば優勝が決まり、ただ一人2敗で追う大鵬が勝てば両者が首位に並ぶという大一番。栃ノ海が素早く左を差し、右は前廻しは取れなかったがおっつけ、大鵬が強引に左に振るのを余裕をもってこらえ、右を差し込んでモロ差しとなり、両下手を取ってヒジを張って出て寄り切る会心の相撲で優勝決定。千秋楽も豊山との大関対決を押し倒しで制して14勝1敗で9場所ぶり2回目の賜盃を手にした。

小兵力士が大型力士に勝つためには、廻しを取らず、取らせず、相手の重みを感じる前に休まずに動き続けることがカギだと心得ていた栃ノ海が、後日、「理想とする相撲が取れた」と語った柏鵬連破で優勝を果たした栃ノ海は、翌39年一月場所も13勝2敗の好成績で、横綱昇進を果たしている。

この場所の柏戸戦、大鵬戦の他
栃ノ海の土俵人生が動画で楽しめる

日本相撲協会公式YouTubeチャンネルの「大相撲アーカイブ場所」で、
栃ノ海の輝かしい土俵人生を振り返る「第49代横綱栃ノ海」の動画を公開中。
メンバーシップ登録（月額990円）すると視聴できます。
下のQRコードからアクセスしてください。

十三日目の栃ノ海－柏戸戦

十四日目の栃ノ海－大鵬戦

2回目の優勝を果たした栃ノ海